

市民と市長との対話集会会議録【要旨】

令和6年4月17日 福岡八布施高之巢町内会農業者

開会

代表 あいさつ

今日は大変、お忙しい中ですが、市長にこの中山間地農業の実態を理解していただければありがたいという思いで開催する。皆さんの希望、要望など、いろいろをざっくばらんに話していただければいいと思う。

よろしくをお願いします。

市長

市民の皆さんとの対話集会に早速申し込みいただきありがとうございます。

4月から始めて、加子母で1回開催し、今回2回目ということで、先ほど会長からお話があったが、農業に関しては、私も全く素人に近いところで、皆さんから大変なところもお聞かせ願いたいですし、やっぱりこの地域ならではの有数の棚田という大変さもあるかと思う。その大変さも含めて、また、どうしたらより良くなっていくかというような、建設的な話し合いができればというふうに思う。限られた時間の中で申し訳ないですけども、ぜひ一言ずつ、お声を聞きたい。どうぞよろしくお願いします。

中山間地域(福岡八布施高之巢町内)の農業について説明(略)

参加者

九州から北海道まで、ここの地域の農業視察に来ている。その中で「全くいいところ」、「環境のいいところで、空は広い」と言ってもらうが、少子化、後継者不足といった問題はみんな一緒だと思う。だんだんと過疎化していく。こういったことへの対策は、それなりに努力していると思うが伝わってこない。実際ここにいる人たちの家庭の中でも、お子さんみんな、中津へ行くか名古屋、東京へ行き、家を向こうで建てる。その歯止めはできるものなのか、方策、何をしたら止まるのか、リニアで止まるのか、そういったことが見えてくるといいと思う。

参加者

よそから来ると、ここは自然豊か、住んで心地よいところな気がする。この地区へ入って本当によかったと言ってもらえるような、人間的なつき合いもいいところ。それを今後ずっと守っていこうと思うと、高齢化で、農業離れがかなり出てきているので荒廃地が出る。それを止めるためにも、皆一緒にやっているが草刈だけでも大変。農業離れで、その草刈も組合が受けているが、私たちも後期高齢者で、いつまでできるかという状態で続けている。

組合で機械化して賄っていけばいいが、そこまで予算もない。そんな状況で、ここを守るためにもどうしたらいいか。経済面とか、難しい機械ほど高齢者は使えないとかあるが、それを何とかして、守っていかなきゃいけない。

市長

結論から言うと、今ここで、こんな得策があるという答えはない。名古屋、東京という都市部に一極集中しているので、たぶん全国の地方どこでもこの悩みはある。

中津川市も、若い人たちに地元で定着、定住してもらい、まずは働いてもらい、それで住んでもらうという取り組みもしている。Iターン、Uターンとあって、1回市外に出ても戻

って来てもらうとか、縁もゆかりもないが中津川で生活したいという人たちを呼び込む取り組みはしているが、山のようにたくさん人が来るかという、来てないのが現実。

農業と絡めた話では、新規就農者には、自然豊かなところで農業ができると、縁もゆかりもないのに、ご夫婦で来て一生懸命やっている方がたくさんみえて、そういう人たちから「よかった」とどんどん発信してもらう取り組みを一緒になってやっている。なかなか得策はないが、そのような形で引き続き取り組んでいくべきと思っている。

少子化でいうと、一番の問題は子どもを産まないことではなく、結婚しないこと。晩婚ではなく、結婚しないことが問題になってきている。中津川市としてもマッチングや機会を作るといったことに取り組んでいる。やっただけの成果はあり、ゼロではない。少しずつでも取り組んでいるという状況。

北海道から九州まで全国から、なぜ、この地域に見学に来るのかお聞きしたい。農業は全く素人だが、全国から農業関係者が見に来るのは、きっと自分たちがやってないことをやっているから見に来る、それが売りになっていると思う。それをもっと一緒になって発信して、そこから新しい就農者を呼び込むといった取り組みもできるのではないかと思う。

参加者

北海道、富良野の方が12、13人来た。北海道は面積も広大で、なぜ中山間地の小さな田んぼを見に来られたかという質問をしたら、北海道も少子高齢化で農業も跡継ぎがない。個人で農業をやっていたが、これからは集落営農組織を立ち上げていかないと維持できないと。集落営農組織をどうやって立ち上げて、運営していった方がいいかということを知りたいということだった。ホームページにも載っているのでもそういうのを見て。九州の佐賀県からも来られた。やはり集落営農をどう立ち上げたか、どう運営するかというところに一番興味がある。組織の立ち上げについて困ったことはなかったかとよく聞かれるが、ここは地域性もあって大変まとまりのいい地域で、あまりそういうことはなかったもので、そこは参考にできないが。

参加者

福岡地域では堤を利用して最初にパイプラインを導入し、わりと大きなほ場になり、機械を共同で使う機械化組合が立ち上がった。現状では、自分たちの地域は、ほ場も割としっかりしていて、大きな機械も使いやすい、何とか経営もできる地域。福岡町全体でいうと、農事組合法人はちたか、下野営農組合、また夏焼営農組合で農業を守っていくという考えの中で、自分の地域の周りの農地も耕作するという流れになっているが、地元と比べてほ場が小さいところがあり、大きな機械では対応できず経費もかかる。

地域の若者で独身が随分多い。高齢者の世帯も最終的には市街に出た子どものところへ行き、空き家が増えてきて、その農地も引き続き営農組合で守ってはいる。農事組合法人はちたかは数多くの後継者がいるが、自分の地域では本当に人がいなくて、実際は70代4人でやっているような状況。最近少しずつ、土日、休みに少し手伝う人ができてきたのが幸いだが、現状は、厳しい。人が少ないのがやはりネックになっている状況。

参加者

下野地区は、福岡4つの町内で最後にやっと立ち上げた状態で、おかげさまでほ場は基盤整備が平らなところが多く、田んぼ1枚当たりの面積もそこそこあり、効率化もまあまあで、何とかやっているが、やはり後継者、担い手不足。65歳から70歳ぐらいまでは仕事をしているので、農業を経験した人が少ない。今、どう勧誘して人を入れるかが一番問題。農

業そのものでなく、草刈もやってない方が多いので、これから先、組合員にしていくのは少し難しいのが現状。

参加者

10年後、多分この地域もかなり空き家が目立ってくる、子どももいない。もちろん中津川市は空き家対策をやっているが、リニアに関係して言えば、農業を磨き上げる、特色を磨き上げる。付知川で釣りする人がいたり、農業も、それを趣味とした人が、空き家に住みながら田畑を借りたり、それに対して地元の人が指導するとか、草刈り機をレンタルするとかして伸ばしていくことも可能かと思う。そういう発想を持っていかないと、この地域は衰退していくばかり。周りを見ていただくと、皆さんが草刈しているので、草がほとんどない。これが、ほったらかしにしてしまうと、若い人はこんなところに、住みたくないって思う。

そのために、もちろん農業は食から始まるが、国土を守るとか、環境を守るとかということまで皆さん一生懸命やっている。皆で考えていかなきゃいけない。

市長

先ほどの見学の話だが、最初はスマート農業に積極的に取り組んでいるところを見学に来ているのかと想像した。若い方が入りやすいというか、農業は大変というイメージを払拭するために、ドローンを使うなどスマート農業を取り入れることで大変さが少し和らぐ、軽減されるという取り組みも、見に来た方にとって先進的な取り組みだと思う。農業をやってみる、新しい人を入れるのには、農業だけではなく林業も含めて、中津川市は自然豊かだということを生かして、体験してもらい、体験型なものを作っていきべきと思っている。

その延長線で定住に結びつくこともあると思う。東京に住んでいて、電車で1、2時間ぐらいのところに農地を借りて、週末だけ1日そこに行って農業して、それが癒しになっているという方は我々が思っている以上にいる。リニアの活用はそういうところにもあると思っている。リニアの開業が延びるような話だが、準備する期間があると思えば、延びたこともプラスだと思っている。リニアが開業すれば東京から1時間、名古屋から15分足らずで中津川市の岐阜県駅、坂本まで来るので、そこからここまでは遠くない。土日を使って、ここでリフレッシュして、心を癒してもらって、また月曜日からの仕事に励んでもらう。そのときには、今以上に、毎日会社に行かなくてもいいという仕事の仕方に変わってきている。今も、週に1回だけ会社に行くとか、パソコン1台だけあれば仕事ができるという方もたくさんいるので、そういった人たちを呼び込む仕組みを作って取り組んでいく。市としても、皆さんといろいろ連携を取りながら、いろんなご意見を聞きながら取り組んでみるといいと思う。

参加者

65歳まで仕事をやっていて、自分ができるときは手伝いをしてきたが、今年4月から本格的にはちたかの農業をやっていく。自分も、もともと農業をやっていて、農業自体は嫌いではなかったのですが、仕事をやめたらこの仕事になるだろうとやってきたので、苦ではなかった。ただ、今の若い人を見ると、意外と農業に携わっている人が少ない、昔と違う。自分が小学校や中学校のころは手伝わされていたのに、今の若い人は、やらずにいきなり来て農業やれと言われてもちょっと、というところもあると思う。その辺を農業体験のような形でやったり、小さいうちから農業に携わる形も取ったらどうかと思う。

参加者

この3月でJAを辞めて、今回正式にはちたかへ。その前から会計の仕事を少しやっていて、内容も大体わかっていたが、やはり売り上げを上げてなかなか収益には重なってこないのが一番大きいところ。

晩婚とか、結婚しないというが、うちの子どもも名古屋に行って、30歳過ぎても独身で全然、帰ってこない。この先、多分帰ってこないと思う。そうするとうちの田んぼも、いずれここをお願いすることになってくる。そんなことで今から少しでも協力できればと思って。

参加者

今69歳で、60歳で定年して、2年ぐらいは会社もちょこちょこ行っていたが、それからずっと営農はちたかで世話になっている。私の場合で言うと55歳まで、会社定年の5年ぐらい前から、事あるごとにちょっと話があるから来いと言われ、そのたびにいろいろ洗脳されてきたので、60歳ぐらいから会社へ行きながら営農作業に来ていた。

私たちは年金を生活費の基盤として、営農で働いた分をプラスアルファして生計を立てている。ところが今は、定年が60歳なのだけれども、年金は65歳からしか出ない。そうになると、その5年間は会社の延長での仕事で収入を得ないと、営農の仕事だけでは生活ができない。65、66歳ぐらいからとなると、よくて75、76歳ぐらいまで現役で、それ以降は臨時になるかと思う。やはり今みたいな形では、ちょっと苦しいという感じがしている。

もう一つは、この地域、中津川市全体を考えても、農業は集落営農でやっているところや、個人で大規模にやるところなどがあると思うが、最終的には集落営農のような形に全てがなっていくような気がする。今は農業をできているが、子ども、孫がもう家を出てしまって、自分たちがいなくなったら、誰かにやってもらうしかない。そうすると、集落営農がその受け皿になる、どんどん進んでいくと思う。はちたかを見ても、経営的に去年あたりから非常に厳しくなってきたので、もし破綻したらどうしたらいいのか、難しい、大きな問題としてあると思う。

参加者

実際のところ、子どもはみんな家を出て、最終的にははちたかにお願いしないと、というようなこともあるので、営農組合を続けていかないといけない。そこも少し力を入れてもらって、1つにまとめるような方法で、福岡でも組織をもっと大きくして、その下に枝を作ってやっていく方向にしていくべきじゃないかと。そうすればお互いにもう少し楽になる。大きな組織にすれば、そういった問題も解決するのではと思っている。

参加者

町の方は今リニアで盛り上がっているが、この恵北はどのような形、どのような地域になっていけばいいのか、市長がどう考えているのか教えてもらいたい。

市長

リニアで盛り上がっているかは別として、延期になったことも含めて、1回、仕切り直しをしないとイケないのが現状。

今の中津川市は広い。加子母、阿木、山口、神坂と本当に広域で、それが中津川市の良さ。中津川市は80%が森林。農業体験型という話もしたが、自然豊かなところを中津川市としては売りにしなきゃいけない。どうやって売りにするか、その1つが体験型。例えば林業、加子母でも話したが、私の子どもが小学校のとき行った親子キャンプで、子どもたちだけのグループで木を一本切り倒した体験をいまだにすごく楽しかったと言っている。そういった

体験を、子どもたちだけでなく大人にも体験してもらって楽しんでもらう、自然に触れてもらう場を、中津川だったらつくれると思う。

リニア駅ができる坂本地区や、中心市街地、JRの中津川駅前とかでは、農業体験、林業体験ができないので、福岡、付知、加子母といった地区は、その良さを生かしたまちづくりを皆さんと一緒に考えてやっていかなきゃいけないし、やりたいと思っている。

参加者

長く事務をやっていて、理事の中で一番若いのが、平成元年の当初から、はちたかにいる。当初、先輩方に引きずり込まれ、補助金の関係とか申請といった事務的なことをやってきた。自分も定年退職したら集落営農組織に入るのは覚悟しているが、やはり、この先、一番ネックなのは後継者不足、いかに後継者を育成していくかを今悩んでいる。最新の農業技術、衛星も利用して、水管理から、トラクターのロボットとか、ドローンもやっているが、そういった最新技術はコストがかかってしまう。コストが多くかかると、後継者の若い人を1人雇用できるくらいの経営をしたいが、なかなかそういうわけにいかない。そういった雇用の方針も、最新技術の導入コスト増もあるので、支援していただけないかと思う。この先、仕事を引退した3年後はまたここでやっていこうと思っているので、後継者1人でもいい、40代を雇えるような組織にしたい。またご支援いただければと思う。

参加者

どうしても過疎で、どんどん農業従事者が都市に取られて、家に誰もいない、後継者がいない。そうなった土地は集落営農に任せてほしいという話をしながら、みんなで頑張っている。どの地域でも同様に、破綻してしまうと山になってしまい、もう手もつけられない状況になっていくのが現状だと思う。

農業自体が経営できるような状況でないといけない。組合長が国から補助がないとやっていけないと言われたが、中山間地域のスマート農業をどうやって利益が出るようにしていくか。その中で、専門で人が雇える状態を確立して、農業は生き残っていき、この土地も整備をされながら残っていくと思う。

やはり、移住定住。リニアで1時間で東京から来て、空き家に住みながら農業をやって、自分で作ったものを食べる、趣味の世界でいくような考え方もしていかないとこの地域は残っていけないと思う。その中で、中津川市にある田んぼ3,200ヘクタールを守っていくのは容易ではない。市単独では難しいので、国、県と連携していただきながら、資金もないところで申し訳ないが、できれば市単独で農業政策も作って、私たち農業者がそこへ一緒に参入して頑張っていかなければいけないと思っている。

参加者

私たちが農事組合法人はちたかを立ち上げて、ちょうど12年たったが、立ち上げた当初は結構人もいたので、70歳になったらもう農業を引退してという考えだったが、だんだん定年も延びて、今では新しい人65歳くらいでしか入ってこない。それで、もうとにかく元気に体を動かせるうちは、皆で一生涯懸命農業やろまいかというスタイルに変わってきた。いつまでも元気に働けるように、ピンピンコロリ精神で頑張りましょう。

市長

皆さんの仲の良さがすごくよくわかって、皆さんの連携、つながりが、この地域の農業を守ってくれているのかなと実感をさせていただいた。農業に携わる方が全国にたくさんいる

中で、全国から見学に来るところはそうそうないし、中津川市内でも、そんなになんかと思う。営農組織に取り組み、組織化されて、運営を継続してやってみえる、またスマート農業も取り入れているというところが、発信の仕方によってはもっと見学に来てもらえる。それがこの地域を知っていただくことになるので、どんどんやるべきで、市としてもお手伝いできればと思う。

この地域の売りの一つだと思っているのは「はちたか米」というブランドがあることで、これはすごいこと。中津川市のふるさと納税で「はちたか米」を出していただいているが、地道に「はちたか米」をよりブランド化していくことが、この地域の生かし方だと思うし、ブランドを持っているということが財産になっている。それをもっとPRする方法も一緒に考えていけるといいと思っている。

後継者の問題は一緒に考えていかなければいけないと思っていて、農業だけではなく、企業経営者も後継者がいないという方が本当に多い。人が集まらないのは、農業とか林業だけでなく、どこも同じ悩みを抱えている。知恵を絞りながら、良い事例も参考にしながら、中津川市も一緒に取り組んでいければと思っている。

今日は貴重な機会をいただき、ありがとうございました。